

古文ドリル：「が」の識別 100問

対象：高校生・大学受験生（共通テスト～難関私大・国公立二次まで） **著作権：**個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：「が」の正体（4パターン）

古文の「が」は **現代語と用法が異なる** 点が試される。大きく **4種類** あります。

種類	接続/品詞	判別ポイント	例
① 格助詞「が」 （主格）	体言・連体 形接続	「～が」と訳す。後ろの用言の 主語を示す	我 が 思ふ人
② 格助詞「が」 （連体修飾格）	体言・連体 形接続	「～の」と訳す。すぐ後ろが体 言	君 が 代・我 が 身
③ 格助詞「が」 （同格）	体言・連体 形接続	「～で」と訳す。後ろの連体形 が同じ人・物を説明する	やむごとなき際にはあらぬ が 、す ぐれて時めき給ふ（ありけり）
④ 接続助詞「が」	連体形接続	逆接「～けれども」・単純接続 「～と・～ところ・～で」	行く が 、戻る

このほか、格助詞「が」には「～のもの」と訳す **準体格** もあります（例：「この歌は、ある人のいはく、大伴のくろぬし**が**なり」〈古今集〉＝大伴黒主の歌である）。数が少ないので、このドリルでは上の4つを練習します。

識別の鉄則

- 主格「が」** は現代語と同じ「～が」（主語を示す）。連体形に付くときは「～のが」と訳す。古文の主格「が」は「我が思ふ人」「犬君が逃がしつる」のように人を表す語に付くことが多く、「月が出づ」のような言い方はふつうしない（古文なら「月出づ」）
- 連体修飾格「が」** は現代語の「～の」に相当（古文独特）。すぐ後ろに体言が来る（我が身・君が代）
- 同格「が」** は「～で」。「が」のあとに連体形が来て、前と同じ人・物を説明する（その連体形の下に前と同じ体言を補える）
- 接続助詞「が」** は連体形＋「が」のあとに言い切りの別の文が続く形（連体形の下に「こと・の」を補っても後ろの主語にならない）→ 逆接「～けれども」か単純接続「～と・～ところ・～で」（平安時代の終わりごろから使われ、中世の文に多い）
- 「我が・君が・誰が」は「が」の **すぐ後ろ** で決まる：体言なら **連体修飾格**（我が身＝私の身）、用言なら **主格**（我が思ふ人＝私が思う人）

🎯 解き方のコツ（時短テクニック）

上の「識別の鉄則」は「が」の用法の決まり。

ここからは、それを **試験本番ですばやく使う** ための見分け方です。

コツ① 「我が／君が／誰が」は「が」のすぐ後ろで決める

すぐ後ろが体言なら連体修飾格「～の」、用言なら主格「～が」。例：「我**が**心」→「私**の**心」（連体修飾格）／「我**が**思ふ人」→「私**が**思う人」（主格）最後に体言（人）があっても、「が」がかかるのはすぐ後ろの「思ふ」。「私の思う人」と訳せても、働きは主格。

コツ② 「が」の直後で見分ける

- ・直後が **体言（名詞）** → 連体修飾格「～の」（例：我が家）
- ・直後が **用言（動詞・形容詞）** で、「が」がその主語 → 主格「～が」（例：我が思ふ人）
- ・後ろの **連体形が前と同じ人・物を説明** している → 同格「～で」
- ・連体形+「が」のあとに **言い切りの別の文** が続き、「こと・の」を補っても後ろの主語にならない → 接続助詞「～けれども／～と・～で」（読点があるだけでは決まらない）

コツ③ 同格「が」は「～が、（連体形）[+前と同じ体言]」のパターン

「が」のあとに **連体形** が来て、その下に前と同じ人・物を補える → 同格。例：「いとやむごとなき際にはあらぬ**が**、すぐれて時めき給ふありけり」（源氏物語・桐壺）→「それほど高貴な身分ではない方**で**、際立って帝のご寵愛を受けていらっしゃる方がいた」「が」の後ろが「世に出でず。」のように、そのまま述語として文を言い切っていれば同格ではない（接続助詞か主格）。読点があるだけでは決まらない。

コツ④ 接続助詞「が」は、主語にならないことを確かめてから訳す

連体形+「が」のあと **言い切りの別の文** が続き、連体形の下に「こと・の」を補っても後ろの主語にならない → 接続助詞。逆接「～けれども」で通れば逆接、逆らう関係がなければ単純接続「～と・～ところ・～で」。例：「行く**が**、戻る」→「行く**けれども**、戻る」（逆接）／「御前に参りたる**が**、人々多くさぶらふ」→「御前に参上した**ところ**、人々が大勢お仕えしている」（単純接続）「雁などの連ねたる**が**、いと小さく見ゆる」（枕草子）のように、補った「の」が後ろの主語になれば主格（列をなしているのが、とても小さく見える）。

試験本番でのチェック順序

1. 「が」の **直前** が体言か連体形かを確認
2. 「が」の **直後** が体言なら連体修飾格（「我が・君が」も同じ）
3. 「が」の後ろの連体形が前と同じ人・物を説明していれば同格

4. 「が」が後ろの用言の主語なら主格（連体形＋「が」は、下に「こと・の」を補って主語になるかを確認する）
5. 連体形＋「が」のあとに言い切りの別の文が続き、主語にならなければ接続助詞（逆接か単純接続か）

→ この順番で確かめれば、**迷わず** 答えが出せます。

よくある引っかけ

- ・「我が心」を現代語感覚で「私が心」（主格）と誤答 → 古文では「私の心」（連体修飾格）
- ・「我が思ふ人」を「私の思う人」と訳して連体修飾格にする → 「が」のすぐ後ろは用言「思ふ」なので主格
- ・「～なるが、」をすべて同格にする → 後ろが「世に出でず。」のように言い切っていれば同格ではない（多くは接続助詞。下に「人・こと」を補って後ろの主語になれば主格）。同格は、後ろに同じ人・物を説明する連体形が来る形
- ・「君が代」を「君が栄える代」と主格で訳す → 「君の御代」（連体修飾格）

採点表

- ・ 基礎（Q1～Q20）： /20
- ・ 標準（Q21～Q50）： /30
- ・ 応用（Q51～Q80）： /30
- ・ 入試レベル（Q81～Q100）： /20
- ・ 合計： /100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

4パターンを識別する基本問題。

Q1. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**住む宿。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「君」＋「が」＋動詞「住む」（連体形）＋体言「宿」。
「が」のすぐ後ろは用言「住む」で、「が」は「住む」の主語を示すので主格。「あなたが住む家」（Q8「君が心」は、すぐ後ろが体言なので連体修飾格）。

Q2. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が代は千代に八千代に。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「代」。「君の代（治世）は千代に八千代に」。国歌「君が代」のもとになった古い歌の一節。『古今集』では初句が「わが君は」で、「君が代は」の形は『和漢朗詠集』などに見える。

Q3. 次の傍線部「が」を識別せよ。

あはれなる人が、また心優しき人。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「あはれなる人」（連体形＋人）＋「が」＋「また心優しき人」。後ろの「心優しき人」が、前の「あはれなる人」と同じ人を説明している所以で同格。「情け深い人で、また心優しい人」。後ろが「～人なり。」と言いつ切る形なら、「が」はその述語の主語（主格）になる。

Q4. 次の傍線部「が」を識別せよ。

行くが、また戻る。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**連体形「行く」＋「が」＋「戻る」。「行くけれども、また戻る」（逆接）。中世以降の用法。

Q5. 次の傍線部「が」を識別せよ。

母が縫ひし衣。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「母」＋「が」＋動詞「縫ひ」（四段「縫ふ」の連用形）＋過去「き」の連体形「し」＋体言「衣」。「が」のすぐ後ろは用言「縫ひ」で、「が」は「縫ひ」の主語を示すので主格。「母が縫った着物」。

Q6. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が家。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「家」。「私の家／わが家」。

Q7. 次の傍線部「が」を識別せよ。

雀の子を犬君が逃がしつる。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「犬君」（召し使いの少女の名）＋「が」＋動詞「逃がし」（四段「逃がす」の連用形）＋完了「つ」の連体形「つる」。「が」は「逃がし」の主語を示す主格。「雀の子を犬君が逃がしてしまったの」。『源氏物語』若紫の巻で、幼い若紫（のちの紫の上）が言う言葉。

Q8. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が心。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「心」。「あなたの心」。

Q9. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いみじき人が、また気高き人。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「いみじき人」（連体形＋人）＋「が」＋「気高き人」。「並々ならぬ人であって、また気高い人」。

Q10. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春来るが、まだ寒し。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**連体形「来る」＋「が」＋「寒し」。「春は来るけれども、まだ寒い」（逆接）。

Q11. 次の傍線部「が」を識別せよ。

誰が問ふ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「誰」（疑問代名詞）＋「が」＋動詞「問ふ」。「誰が尋ねる」。

Q12. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が思ふ人。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「我」＋「が」＋動詞「思ふ」（連体形）＋体言「人」。「が」のすぐ後ろは体言ではなく用言「思ふ」で、「が」は「思ふ」の主語を示すので主格。「私が（恋しく）思う人」。「私の思う人」と訳すこともあるが、働きは主格。

Q13. 次の傍線部「が」を識別せよ。

翁**が**植ゑし松。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「翁」＋「が」＋動詞「植ゑ」（ワ行下二段「植う」の連用形）＋過去「き」の連体形「し」＋体言「松」。「が」は「植ゑ」の主語を示すので主格。「老人が植えた松」。

Q14. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**御代。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「御代」。「あなた様のご治世」。

Q15. 次の傍線部「が」を識別せよ。

心ある人**が**、また物静かなる人。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「心ある人」＋「が」＋「物静かなる人」。「心のある人であって、また物静かな人」。

Q16. 次の傍線部「が」を識別せよ。

行かむと思ふ**が**、雨降り。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**連体形「思ふ」＋「が」＋「雨降り」（「降れ」＋存続「り」）。「行こうと思うけれども、雨が降っている」（逆接）。

Q17. 次の傍線部「が」を識別せよ。

父**が**仰せ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「父」＋「が」＋体言「仰せ」。「父の仰せ」。

Q18. 次の傍線部「が」を識別せよ。

父が言ひしこと。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「父」＋「が」＋動詞「言ひ」（連用形）＋過去「き」の連体形「し」＋体言「こと」。「が」のすぐ後ろは用言「言ひ」なので主格（Q17「父が仰せ」は、すぐ後ろが体言なので連体修飾格）。「父が言ったこと」。

Q19. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が身。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「身」。「私の身／わが身」。

Q20. 次の傍線部「が」を識別せよ。

笛吹く人が、また歌詠みけり。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「笛吹く人」（連体形＋人）＋「が」＋「また歌詠みけり」。後ろは過去「けり」の終止形で文を言い切っているなので、同じ人を説明する連体形ではなく同格ではない（Q3・Q9・Q15のように「～人」で終わる形とちがう）。「が」は「詠み（けり）」の主語を示す主格。「笛を吹く人が、また歌を詠んだ」。

基礎編 / 20

【第2部】標準編（Q21～Q50）

接続助詞と格助詞の見分け、文脈での判別を含む応用問題。

Q21. 次の傍線部「が」を識別せよ。

宮も君が心を知り給はず。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「心」＋「を知り給はず」。「知り給はず」の主語は「宮」で、「君が心」はその目的語。「が」は体言「心」にかかる連体修飾格。「宮様もあなたの心をご存じない」。

Q22. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月明らかなる夜なる**が**、にはかに雲出でて、月隠れぬ。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「夜なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」。後ろは「月隠れぬ」（完了「ぬ」の終止形）で文を言い切っているので同格ではなく、後ろの主語は「雲」「月」なので主格でもない。「月の明るい夜であるのに、急に雲が出て、月が隠れてしまった」と前後が逆らう関係なので逆接。

Q23. 次の傍線部「が」を識別せよ。

風吹く**が**、波は立たず。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「吹く」連体形＋「が」＋「波は立たず」。風が吹けばふつう波が立つのに立たない、という予想に反する関係なので逆接。「風は吹くけれども、波は立たない」。接続助詞「が」は平安時代の終わりごろから使われるようになった。

Q24. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我**が**心、君は知らじ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「心」。「私の心」。

Q25. 次の傍線部「が」を識別せよ。

兄**が**出でて行きし後、家の内いと寂し。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「兄」＋「が」＋下二段「出づ」の連用形「出で」＋「て」＋「行き」＋過去「き」の連体形「し」＋体言「後」。「が」は「出で（て行き）」の主語を示す主格。「兄が出て行った後、家の中はたいそう寂しい」。

Q26. 次の傍線部「が」を識別せよ。

子は父**が**仰せに従ふ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「父」＋「が」＋体言「仰せ」＋格助詞「に」＋動詞「従ふ」。「従ふ」の主語は「子」なので、「が」は体言「仰せ」にかかる連体修飾格。「子は父の仰せに従う」。

Q27. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いみじき宿世の人なる**が**、いま落ちぶれぬ。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「人なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「いま落ちぶれぬ」。後ろの「落ちぶれぬ」は完了「ぬ」の終止形で文を言い切っている所以同格ではない。下に「人」を補うと「人である人」と重なるので主格でもない。「並々ならぬ宿縁の人であるのに、今は落ちぶれてしまった」と前後が逆らう関係なので逆接。

Q28. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我**が**身を恨み給ふな。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「身」。「私の身を恨みなさるな」。

Q29. 次の傍線部「が」を識別せよ。

文をやる**が**、返り事もせず。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**四段「やる」の連体形＋「が」＋「返り事もせず」。手紙を送ったのに返事がない、という予想に反する関係なので逆接。「手紙を送るけれども、（相手は）返事もしない」。

Q30. 次の傍線部「が」を識別せよ。

あるじ**が**来れば、皆立ちて迎ふ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「あるじ」＋「が」＋カ変「来」の已然形「来れ」＋「ば」。「が」は「来れ」の主語を示す主格。「主人が来ると、皆が立って迎える」。

Q31. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**御志。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「御志」。「あなた様のお志」。

Q32. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春行くが、なほ花散らず。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「行く」連体＋「が」＋「散らず」。「春が行くのに、なお花が散らない」。

Q33. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が生まれし日。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「我」＋「が」＋連用「生まれ」＋過去「き」連体「し」＋体言「日」。「が」のすぐ後ろは用言「生まれ」で、「が」は「生まれ」の主語を示すので主格。「私が生まれた日」。

Q34. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月清き夜なるが、また風静かなり。

答え：接続助詞「が」（単純接続） **解説：**「夜なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「また風静かなり」。後ろの「静かなり」は終止形で文を言い切っている所以同格ではなく、その主語は「風」なので主格でもない。前後に逆らう関係はなく、「また」で付け加えているので単純接続。「月の清らかな夜で、そのうえ風も静かだ」。

Q35. 次の傍線部「が」を識別せよ。

雪の降り出づるが、いとあはれなり。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「降り出づる」（下二段「降り出づ」の連体形）＋「が」＋「あはれなり」。「雪の降り出づる」の下に「こと・の」を補うと「あはれなり」の主語になるので主格。「雪が降り始めるのが、たいそうしみじみと趣深い」。

Q36. 次の傍線部「が」を識別せよ。

父が怒り給ふ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「父」＋「が」＋動詞「怒り」（四段「怒る」の連用形）＋尊敬「給ふ」。「怒り」はここでは名詞ではなく動詞で、「給ふ」と続いて述語になっている。「が」はその主語を示すので主格。「父がお怒りになる」。

Q37. 次の傍線部「が」を識別せよ。

物言はぬ人なるが、人の心をよく知り給ふありけり。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「人なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「人の心をよく知り給ふ」（「給ふ」は連体形）＋「ありけり」。「給ふ」の下に前と同じ「人（方）」を補えるので同格。「口数の少ない人で、人の心をよくわかっていらっしゃる方がいた」。

Q38. 次の傍線部「が」を識別せよ。

心安らかなる人が、いと頼もし。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「心安らかなる人」＋「が」＋形容詞「頼もし」（終止形）。後ろに同じ人を説明する連体形がなく、「頼もし」で言い切っているので同格ではない。「が」は「頼もし」の主語を示す主格。「心穏やかな人が、たいそう頼もしい」。

Q39. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春雨降るが、花咲かず。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「降る」連体＋「が」＋「咲かず」。「春雨が降るけれども、花が咲かない」。

Q40. 次の傍線部「が」を識別せよ。

母上は、君が御身をのみ案じ給ふ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「御身」。「案じ給ふ」の主語は「母上」なので、「が」は体言「御身」にかかる連体修飾格。「母上は、あなた様のお体のことばかりを心配していらっしゃる」。

Q41. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が思ふこと、人に語らじ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「我」＋「が」＋動詞「思ふ」（連体形）＋体言「こと」。「が」は「思ふ」の主語を示す主格。「私が思っていることは、人に話すまい」。

Q42. 次の傍線部「が」を識別せよ。

年老いたる翁なるが、目もよく見えぬ、杖にすがりて来たり。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「翁なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「目もよく見えぬ」（打消「ず」の連体形「ぬ」）。「見えぬ」の下に前と同じ「翁」を補えるので同格。「年老いた翁で、目もよく見えない翁が、杖にすがってやって来た」。

Q43. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が来るを待つ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「君」＋「が」＋カ変「来」の連体形「来る」＋格助詞「を」＋動詞「待つ」。「が」は「来る」の主語を示す主格（「君が来る」のまとまりが「待つ」の目的語になっている）。「あなたが来るのを待つ」。

Q44. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心、いまだ定まらず。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「心」。「私の心は、まだ定まらない」。

Q45. 次の傍線部「が」を識別せよ。

都より来たる人なるが、物よく知りたる、この里に住みけり。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「人なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「物よく知りたる」（存続「たり」の連体形）。「知りたる」の下に前と同じ「人」を補えるので同格。「都から来た人で、物事をよく知っている人が、この里に住んでいた」。

Q46. 次の傍線部「が」を識別せよ。

鶯鳴くが、春なほ浅し。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「鳴く」連体＋「が」＋「浅し」。「鶯が鳴くけれども、まだ春は浅い」。

Q47. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が家、京にあり。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「家」。「私の家は、京にある」。

Q48. 次の傍線部「が」を識別せよ。

鳥の飛ぶが見ゆ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「飛ぶ」連体形＋「が」＋動詞「見ゆ」。連体形「飛ぶ」の下に「の・さま」を補うと「見ゆ」の主語になるので主格（連体形が体言のように使われている＝準体法）。「鳥が飛ぶのが見える」。

Q49. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が仰せに従ひ給へ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「仰せ」。「あなた様の仰せに従いなさい」。

Q50. 次の傍線部「が」を識別せよ。

人あまた呼びて尋ぬるが、知る者なし。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「尋ぬる」（下二段「尋ぬ」の連体形）＋「が」＋「知る者なし」。後ろの「なし」は終止形で文を言い切っているので同格ではなく、その主語は「知る者」なので主格でもない。「人を大勢呼んで尋ねるけれども、知っている者はいない」と前後が逆らう関係なので逆接。

標準編 / 30

【第3部】 応用編（Q51～Q80）

文脈・係り結び・引用が絡む応用問題。

Q51. 次の傍線部「が」を識別せよ。

あひ知りたる人^が、また同じ道を行きけり。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「あひ知りたる人」（連体形＋人）＋「が」＋「また同じ道を行きけり」。後ろは過去「けり」の終止形で文を言い切っているなので、同じ人を説明する連体形ではなく同格ではない。「が」は「行き（けり）」の主語を示す主格。「知り合いの人が、また同じ道を行った」。

Q52. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我^が思ふ人、いま死にぬ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「我」＋「が」＋動詞「思ふ」（連体形）＋体言「人」。「が」は「思ふ」の主語を示す主格。「私が（恋しく）思う人が、今、死んでしまった」。

Q53. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月明らけき夜なる^が、木の下はなほ暗し。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「夜なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「木の下はなほ暗し」。後ろの「暗し」は終止形で文を言い切っているので同格ではなく、その主語は「木の下」なので主格でもない。「月の明るい夜であるのに、木の下はやはり暗い」と前後が逆らう関係なので逆接。

Q54. 次の傍線部「が」を識別せよ。

鳥のさへづる^が、いとあはれなり。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「さへづる」連体形＋「が」＋形容動詞「あはれなり」。「鳥のさへづる」は「鳥がさえずること」の意味の連体形で、それが「あはれなり」の主語なので主格。「鳥がさえずるのが、たいそうしみじみと趣深い」。

Q55. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君^が御志ありて、世に伝はる。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「御志」。「あなた様のお志があって、世に伝わる」。

Q56. 次の傍線部「が」を識別せよ。

知らぬ人**が**問ふ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「知らぬ人」連体＋「が」＋動詞「問ふ」。「知らない人が尋ねる」。

Q57. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我**が**国の人、もろこしに渡る。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「国」。「我が国の人**が**、中国に渡る」。

Q58. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いみじき才ありし人なる**が**、世に出でず。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「人なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「世に出でず」。後ろの「出でず」は終止形で文を言い切っているので同格ではない。下に「人」を補うと「人である人」と重なるので主格でもない。「並々ならぬ才能があった人であるけれども、世に出ない」と前後が逆らう関係なので逆接。

Q59. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる――この歌、人皆知る**が**、その心、知らず。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「知る」連体＋「が」＋「知らず」。「この歌を人々皆知っているが、その心は知らない」。

Q60. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いと尊き人なる**が**、人前にては謙りて、自らを卑しめ給ふ。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「人なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「人前にては謙りて、自らを卑しめ給ふ」。後ろは「給ふ」で文を言い切っているので同格ではない。下に「人」を補うと「人である人」と重なるので主格でもない。「たいそう尊い人であるのに、人前ではへりくだって、自分を低く扱いなさる」と前後が逆らう関係なので逆接。

Q61. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心ながらも、悲し。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「心」＋助詞「ながら」＋「悲し」。「私の心ながらも、悲しい」。

Q62. 次の傍線部「が」を識別せよ。

仏に祈らむがためなり。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、「～の」） **解説：**「祈らむ」（未然＋意志「む」連体）＋「が」＋「ため」。「仏に祈ろうとするためである」。「～むがため」は古文の定型表現で「～のため」と訳す連体修飾格。

Q63. 次の傍線部「が」を識別せよ。

おのが行く方も知らず。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**代名詞「おの」（自分）＋「が」＋動詞「行く」（連体形）＋体言「方」。「が」のすぐ後ろは用言「行く」で、「が」は「行く」の主語を示すので主格。「自分が行く方角もわからない」。

Q64. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が思ふ人は、誰がゆゑにかく嘆くらむ。

答え：①最初の「が」＝主格 ②後の「が」＝連体修飾格 **解説：**－「我が思ふ人」：「が」のすぐ後ろは用言「思ふ」で、「思ふ」の主語を示す主格（私が思う人）－「誰がゆゑ」：「が」のすぐ後ろは体言「ゆゑ」で、連体修飾格（誰のせいで）「らむ」は現在推量（疑問の語「誰」を受けて連体形）。「私が思う人は、誰のせいでこのように嘆いているのだろうか」。

Q65. 次の傍線部「が」を識別せよ。

若き法師なるが、歌よく詠むありけり。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「法師なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「歌よく詠む」（連体形）＋「ありけり」。「詠む」の下に前と同じ「法師」を補えるので同格。「若い法師で、歌を

上手に詠む法師がいた」。『源氏物語』桐壺の「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり」と同じ形。

Q66. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いとあはれなる人なる**が**、心の浅きこと申すよ。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「人なる」（断定「なり」連体形）＋「が」＋後の文。後ろは「申すよ」で文を言い切っている所以で同格ではない。下に「人」を補うと「人である人」と重なるので主格でもない。前後が逆らう関係なので逆接。「たいそう情け深い人であるのに、思慮の浅いことを申し上げるよ」。

Q67. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**御身、健やかにあれ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「御身」。「あなた様のお身が、健やかにあれ」。

Q68. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我**が**家に來たる人、皆もてなさず。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「家」。「私の家に來た人を、皆もてなさない」。

Q69. 次の傍線部「が」を識別せよ。

木の葉散る**が**、なほ風吹かず。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「散る」連体＋「が」＋「吹かず」。「木の葉が散るが、なお風は吹かない」（矛盾）。

Q70. 次の傍線部「が」を識別せよ。

童**が**呼ぶ声、遠く聞こゆ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**体言「童」＋「が」＋動詞「呼ぶ」（連体形）＋体言「声」。「が」のすぐ後ろは用言「呼ぶ」で、「が」は「呼ぶ」の主語を示すので主格（最後に体言「声」が

あっても、「が」がかかるのは「呼ぶ」)。「子どもが呼ぶ声が、遠くに聞こえる」。

Q71. 次の傍線部「が」を識別せよ。

年若き者なるが、心ばへいとよき、主によく仕へけり。

答え：格助詞「が」(同格) **解説：**「者なる」(断定「なり」の連体形) + 「が」 + 「心ばへいとよき」(形容詞「よし」の連体形)。「よき」の下に前と同じ「者」を補えるので同格。「年の若い者で、気立てがたいそうよい者が、主人によく仕えた」。

Q72. 次の傍線部「が」を識別せよ。

桜花散るが、山吹はなほ盛りなり。

答え：接続助詞「が」(逆接) **解説：**「散る」連体形 + 「が」 + 「山吹はなほ盛りなり」。「桜は散るけれども、山吹はまだ盛りだ」と前後が逆らう関係なので逆接。

Q73. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月隠るるが見ゆ。

答え：格助詞「が」(主格) **解説：**「隠るる」(下二段「隠る」の連体形) + 「が」 + 動詞「見ゆ」。「隠るる」の下に「の・さま」を補うと「見ゆ」の主語になるので主格。「月が隠れるのが見える」。

Q74. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心、いま定まりぬ。

答え：格助詞「が」(連体修飾格、=「～の」) **解説：**「我」 + 「が」 + 体言「心」。「私の心は、今、定まった」。

Q75. 次の傍線部「が」を識別せよ。

旅人が問ふ。

答え：格助詞「が」(主格) **解説：**「旅人」 + 「が」 + 動詞「問ふ」。「旅人が尋ねる」。

Q76. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いと幼き童なる**が**、笛ををかしう吹くありけり。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**「童なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「笛ををかしう吹く」（連体形）＋「ありけり」。「吹く」の下に前と同じ「童」を補えるので同格。「たいそう幼い子どもで、笛を趣深く吹く子どもがいた」。

Q77. 次の傍線部「が」を識別せよ。

名にし負ふ都鳥**が**ゆゑ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「都鳥」＋「が」＋体言「ゆゑ」。「都鳥のゆえに」。

Q78. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我**が**ゆゑに、君は苦しみ給ふ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「ゆゑ」。「私のせいで、あなた様は苦しんでいらっしゃる」。

Q79. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**心、定まらず。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、「～の」） **解説：**「君」（体言）＋「が」＋「心」。「あなたの心は、定まらない」。人称代名詞＋「が」＋体言は連体修飾格の典型。

Q80. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**思ひ給ふやう。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「君」＋「が」＋動詞「思ひ」（四段「思ふ」の連用形）＋尊敬「給ふ」（連体形）＋体言「やう」。「が」は「思ひ給ふ」の主語を示すので主格。「あなた様が思いになること（その中身）」。

【第4部】入試レベル（Q81～Q100）

Q81. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が身、いまだ若きを、なほ嘆く。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） 解説：「我」＋「が」＋体言「身」。「私の身が、まだ若いのに、なお嘆く」。

Q82. 次の傍線部「が」を識別せよ。

その頃、大納言の御娘なるが、琴をいみじう弾き給ふ、おはしけり。

答え：格助詞「が」（同格） 解説：「御娘なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「琴をいみじう弾き給ふ」（「給ふ」は連体形）＋「おはしけり」。「給ふ」の下に前と同じ「御娘（方）」を補えるので同格。「その頃、大納言のお嬢様で、琴をたいそう見事にお弾きになる方がいらっしゃった」。

Q83. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君が御代、千代にもがな。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） 解説：「君」＋「が」＋体言「御代」＋「千代にもがな」（「もがな」は願望の終助詞）。「わが君のご治世が、千年も続いてほしいものだなあ」。

Q84. 次の傍線部「が」を識別せよ。

中宮、御文書かせたまふが、ことのほかに気高し。

答え：格助詞「が」（主格） 解説：「書かせたまふ」（尊敬「す」＋「たまふ」の二重敬語）の連体形＋「が」＋「気高し」。「たまふ」の下に「さま」を補うと「気高し」の主語になるので主格。「中宮がお手紙をお書きになるご様子が、格別に気品がある」。後ろは「気高し」で言い切っているので同格ではない。

Q85. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が見し人の、いまは無きを嘆く。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「我」＋「が」＋動詞「見」（上一段「見る」の連用形）＋過去「き」の連体形「し」＋体言「人」。「が」のすぐ後ろは用言「見」で、「が」は「見」の主語を示す主格（「人の」の「の」は「無き」の主語を示す主格の格助詞）。「私が（かつて）会った人が、今はもういないことを嘆く」。

Q86. 次の傍線部「が」を識別せよ。

飛ぶ鳥のさへづり、いと聞きにくき**が**、なほ耳澄まして聞く。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「聞きにくき」（形容詞「聞きにくし」の連体形）＋「が」＋「なほ耳澄まして聞く」。後ろは「聞く」で言い切っている所以同格ではなく、「聞きにくき（の）」を補っても「聞く」の主語にはならない。「（さえずりは）たいそう聞きとりにくいけれども、それでも耳を澄まして聞く」と前後が逆らう関係なので逆接。

Q87. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我**が**心ぞ嘆かるる。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「心」＋係助詞「ぞ」＋「嘆か」（四段「嘆く」の未然形）＋自発「る」の連体形「るる」（「ぞ」の結び）。「が」は体言「心」にかかる連体修飾格。「私の心が、自然と嘆かれる」。

Q88. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月明らかなる夜なる**が**、雲なくしてさやけし。

答え：接続助詞「が」（単純接続） **解説：**「夜なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「雲なくしてさやけし」。後ろの「さやけし」は終止形で文を言い切っている所以同格ではない。下に「夜」を補うと「夜である夜」と重なるので主格でもない。前後に逆らう関係はないので単純接続。「月の明るい夜で、雲もなく澄みきっている」。

Q89. 次の傍線部「が」を識別せよ。

君**が**御身を案じ奉る人、世に多し。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「君」＋「が」＋体言「御身」。「案じ奉る」の主語は「人」なので、「が」は体言「御身」にかかる連体修飾格（「奉る」は謙譲の補助動詞）。「あなた様のお体をご心配申し上げる人が、世の中に多い」。

Q90. 次の傍線部「が」を識別せよ。

名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はいやなしやと

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「わ」（我）＋「が」＋動詞「思ふ」（連体形）＋体言「人」。

「が」は「思ふ」の主語を示す主格。『伊勢物語』九段（東下り）の歌。「（都という）名を持っているのならば、さあ尋ねよう、都鳥よ。私が恋しく思う人は無事でいるかいらないかと」。

Q91. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が心ながら、いかにせむ。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**「我」＋「が」＋体言「心」＋助詞「ながら」。「私の心ながら、どうしようか」。

Q92. 次の傍線部「が」を識別せよ。

嵐の風吹くが、舟出でぬ。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「吹く」連体＋「が」＋「出でぬ」（完了「ぬ」の終止形）。
「嵐の風が吹いているのに、舟は出てしまった」（逆接）。

Q93. 次の傍線部「が」を識別せよ。

月の出づるが心もとなし。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「出づる」（下二段「出づ」の連体形）＋「が」＋形容詞「心もとなし」（終止形）。「月の出づる」の下に「の・こと」を補うと「心もとなし」の主語になるので主格。「月が出るのが、待ち遠しい（じれったい）」。

Q94. 次の傍線部「が」を識別せよ。

我が思ひ嘆くこと、限りなし。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「我」＋「が」＋動詞「思ひ嘆く」（連体形）＋体言「こと」。
「が」は「思ひ嘆く」の主語を示す主格。「私が思い嘆くことは、限りがない」。

Q95. 次の傍線部「が」を識別せよ。

唐土の人なるが、和歌をも詠み給ふ。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「人なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「和歌をも詠み給ふ」。後ろは「給ふ」で文を言い切っているので同格ではない。下に「人」を補うと「人である人」と重なるので主格でもない。「中国の人であるのに、和歌までもお詠みになる」と、「も」が示すように予想に反する関係なので逆接。

Q96. 次の傍線部「が」を識別せよ。

宮、御琴を弾き給ふが、ほのかに聞こゆ。

答え：格助詞「が」（主格） **解説：**「弾き給ふ」（「給ふ」は連体形）＋「が」＋動詞「聞こゆ」。「給ふ」の下に「音」を補うと「聞こゆ」の主語になるので主格。「宮が御琴をお弾きになる音が、かすかに聞こえる」。

Q97. 次の傍線部「が」を識別せよ。

春過ぎて夏来ぬるが、まだ涼し。

答え：接続助詞「が」（逆接） **解説：**「来ぬる」（カ変「来」の連用形＋完了「ぬ」の連体形）＋「が」＋「まだ涼し」。後ろは「涼し」で言い切っていて、夏が来たのに涼しいという逆らう関係なので逆接。「春が過ぎて夏が来てしまったけれども、まだ涼しい」。

Q98. 次の傍線部「が」を識別せよ。

心ある人なるが、和歌の道に心入れ給ふ。

答え：接続助詞「が」（単純接続） **解説：**「人なる」（断定「なり」の連体形）＋「が」＋「和歌の道に心入れ給ふ」。後ろは「給ふ」で文を言い切っているので同格ではない（「～心入れ給ふありけり」なら同格）。下に「人」を補うと「人である人」と重なるので主格でもない。前後に逆らう関係はないので単純接続。「風流を解する人で、和歌の道に熱心でいらっしゃる」。

Q99. 次の傍線部「が」を識別せよ。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

答え：格助詞「が」（同格） **解説：**『源氏物語』桐壺の巻の冒頭。「あらぬ」（打消「ず」の連体形）＋「が」＋「すぐれて時めき給ふ」（「給ふ」は連体形）＋「ありけり」。「あらぬ」の下にも「時めき給ふ」の下にも同じ「人（方）」を補えるので同格。「どの帝の御代であったか、女御や更衣が大勢お仕えしていらっしやった中に、それほど高貴な身分ではない方で、際立って帝のご寵愛を受けていらっしやる方がいた」。この「が」を主格とみる説もあるが、学校文法では同格の代表例として扱う。

Q100. 次の傍線部「が」を識別せよ。

行く川のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。たましきの都のうちに棟を並べ、薨を争へる、高き、いやしき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。或は去年焼けて今年作れり。或は大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人**が**中に、わづかにひとりふたりなり。

答え：格助詞「が」（連体修飾格、＝「～の」） **解説：**方丈記。「二三十人」＋「が」＋体言「中」。「二三十人の中で、わずかに一人二人である」。

入試レベル / 20

合計 / 100

あとがき

「が」の識別の核心： - **格助詞「が」（主格）** 現代語と同じ「～が」（主語）。古文では人を表す語に付くことが多い - **格助詞「が」（連体修飾格）** 現代語の「～の」に相当（古文独特）。すぐ後ろが体言 - **格助詞「が」（同格）** 「が」のあとに連体形が来て、前と同じ人・物を説明する（下に同じ体言を補える） - **接続助詞「が」** 平安時代の終わりごろから使われる。連体形＋「が」のあとに言い切りの文が続く（「こと・の」を補っても後ろの主語にならない）、逆接「～けれども」か単純接続「～と・～で」

「我が・君が・誰が」は「が」のすぐ後ろで決まる：体言なら **連体修飾格**（我が身＝私の身）、用言なら **主格**（我が思ふ人＝私が思う人）。

著作権：個別指導塾フィット / 中本裕太

